



写真-1 満開の桜と花見客で賑わう夙川を撮影（平成26年4月）

■ 川面に映る満開の桜～阪神間屈指の桜の名所

上の写真-1は、阪急電鉄甲陽線・苦楽園口駅の東を南流する夙川（しゅくがわ）を川中に設置している飛石上から撮ったものです。松の緑をバックに、夙川の流れて両岸から覆いかぶさるように咲く満開の桜と、水鏡のような川面に映る桜のシンメトリーは見事で、平日でも大勢の花見客で賑わいます。

写真-2の松の緑の向こうに見える「甲山（かぶとやま）」の南から流れ下る夙川の流れて、河床から見上げるとまるで桜のトンネルのようで、阪神間屈指の桜の名所として平成2（1990）年3月「夙川公園」が「さくら名所100選の地」に選定されています。



写真-2 夙川の向うに見える甲山

■ 夙川の伏流水が「宮水」を涵養

現在の夙川は、阪急甲陽線の北夙川橋梁を抜けるとほぼまっすぐに南流して御前浜（おまえはま）で海に流れ込んでいますが、昔の夙川は、西宮神社の東を流れて海に流れ込んでいたそうです。

その夙川の旧河道を通り西宮神社付近を流れてくる「戎伏流」と、東川の方からかつて海だった地層を通ってくる「札場筋伏流」・「法安寺伏流」の各伏流水が宮水地帯（西宮神社の南東側一帯）で合流し、絶妙なブレンドをなしてミネラルが豊富で鉄分をごく微量しか含まない酒造に最適な「宮水」になるそうです。

一般的に清酒は、夏を越す頃には「秋落ち」といって味が落ちると言われていましたが、「宮水」で造った酒は「秋晴れ」と呼ばれ、味が一段と芳醇になるのが特色です。天保 8（1837）年に灘五郷※1 の一つである魚崎郷の雀部市右衛門（ささべいちえもん）が西宮で鱗（うろこ）井戸を発見し、この井戸水を用いて造った酒を江戸に出荷したところ大変好評でした。

さらに、天保 11（1840）年同じく魚崎郷の山邑太左衛門（やまむらたさえもん）は、「秋晴れ」の要因が酒造米や蔵人の技量によるものではなく、仕込み水に用いている西宮郷の井戸水にあることを実証、以後各酒造家は競って西宮の水「宮水」を仕込み水に用いるようになり、「灘の酒」は天下に名声を博するに至りました。

※1 灘五郷：東から今津郷、西宮郷（以上が現・西宮市）、魚崎郷、御影郷、西郷（以上が現・神戸市）。

■ 弥生時代の夙川

『西宮市史・第一巻』によると、かつて「暴れ川」と呼ばれていた夙川は、大井手町北側から南東方向に向かい、西宮神社の東を通り海へ流れ込んでいたとされています。（これを「古夙川 1」とする）

そして、阪急今津線の今津駅から阪神国道駅の周辺には、頭に「津門」が付く地名が多くありますが、この「津門（つと）」は、入り海にできた港への入口を指す地名と考えられ、港は「務古水門（むこのみなと）」を指すのではないかとされています。

この土地は武庫川の氾濫によって形成された三角州の南西部に、「古夙川 1」や東川の搬出する土砂が吹き寄せられ堆積してできたものとされています。（図-1 参照）

一方、西宮神社付近の土地は、背後の夙川丘陵が宮西町付近まで延びていて、海中に突出していた先端部から東方に向かって、ほぼ一直線に形成された砂嘴※2と考えられています。

弥生時代中期から古墳時代中期にかけて栄えたこ

の港も、やがて川から流れ出てきた土砂で埋まり、万葉集に詠まれたのを最後に記録や史料から姿を消し、ついには港としての機能を失ってしまいます。陸化はどんどん進行し、中世後期には完全に埋まってしまったそうです。

※2 砂嘴：沿岸流により運ばれた砂礫が陸地から海に伸びて嘴（くちばし）状に堆積した地形を指す。砂嘴が対岸にくっつくように成長すると砂州になる。



■ 二度にわたって付け替えられた夙川

P.5 図-7 の絵図は、天保 14 (1843) 年頃の西宮町周辺絵図です。絵図には、古夙川の河道跡と考えられる水路が描かれているので、これに加えて後述する常磐町の一本松、六湛寺川や洗戎川の流路などを参考に古夙川の流路を筆者の想像で描いてみました (図-2)。イメージ程度のものとご理解ください。

平安時代末期ぐらいまでには、東川や「古夙川 1」などが運んできた土砂が入り海をなかなかに埋めてしまい、砂嘴上の西宮神社を中心に発展してきた西宮の町はたびたび水害に見舞われるようになります。そこで「古夙川 1」の川筋を西方に移し、西宮神社の西側から海に流すようにしました。(これを「古夙川 2」とする) 今の洗戎川の流路が概ねこれに該当するとされています。

その後、「古夙川 2」が運搬する土砂によって現在の建石町付近は砂嘴が発達し、西宮神社とこの砂嘴の間は潟湖(せきこ)になり徐々に埋まっていきました。そして、いつの頃から潟湖が陸化しないうちに河道を西に移し、古夙の台地を削り、堤防を築いて夙川をまっすぐ南流するようにしたようで、これが現在の夙川です。

では、なぜ二度目の付け替えがなされたのでしょうか。「古夙川 2」の流路沿いにあった荒戎町(あらえびすちよう)の由来は、一説に「古夙川 2」がたびたび氾濫することから「荒戎川(現・洗戎川)」と呼ばれるようになったとも言われ、それゆえの付け替えではないかと考えられています。

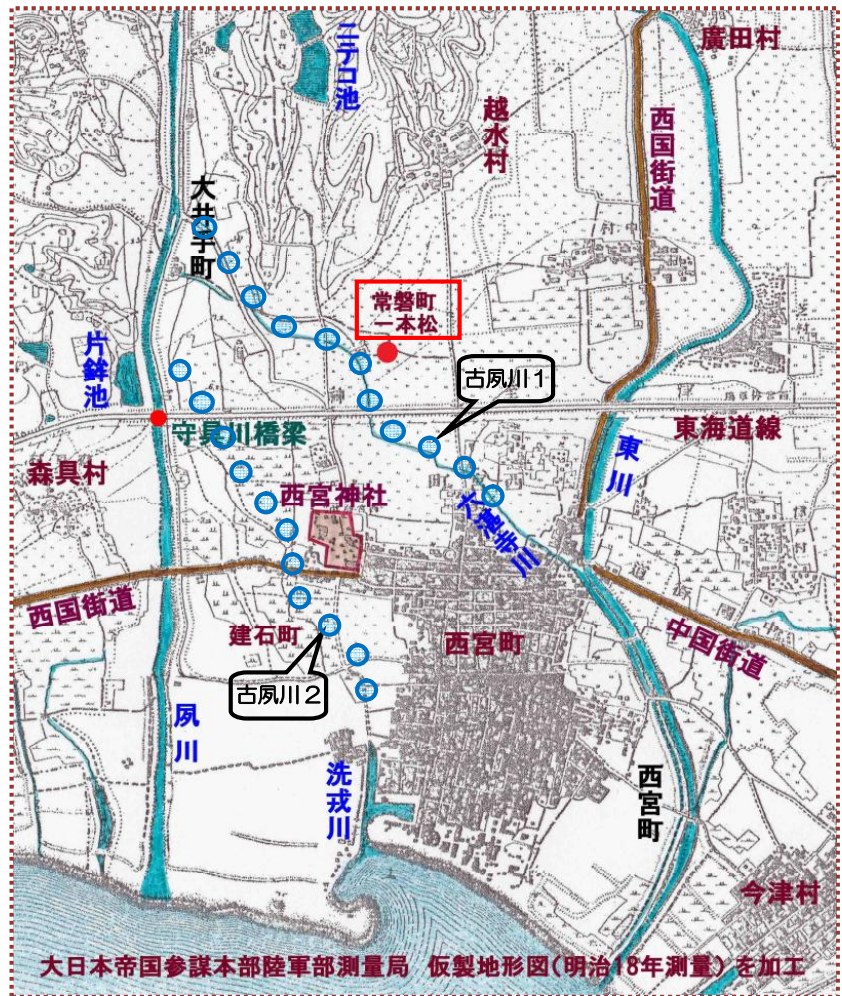


図-2 夙川の流路変遷想像図

■ 武庫郡と菟原郡の郡界変更が夙川の流路変遷を推定する鍵になる

武庫郡と菟原(うはら)郡の郡界は、現在の西宮市と芦屋市の市境を流れる堀切川とほぼ一致しますが、これが郡界になったのは江戸時代中頃のことです。それ以前はもう少し東に郡界があったそうです。

平安時代の延長 5 (927) 年にまとめられた『延喜式神名帳^{※3}』には、「大国主西神社(おおくにぬしにしんじや)は菟原郡に属する」と書かれています。西宮神社が「大国主西神社」を母体として成立し、その位置は変わっていないとすると、平安時代、武庫郡と菟原郡の郡界は西宮神社より東にあったことになります。

では、なぜ今よりずっと東に郡界があったのでしょうか。この疑問に関しては、夙川がかつて西宮神社の東側を流れていて、その流路が郡界であったと考えると説明がつきます。



写真-3 西宮神社

※3 延喜式神名帳(えんぎしきしんみょうちよう): 平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)である『延喜式』の巻九・十のことで、当時「官社」に指定されていた全国の神社一覧である。

■ 武庫郡と菟原郡のかつての郡界を示す石柱～常磐町の一本松

武庫郡と菟原郡のかつての郡界を示す石柱が、西宮神社の北約 500m の常磐町にあります。一本松の横に地蔵尊があり、その前には「一本松地蔵尊」と刻まれた石柱と並んで、「史蹟往古武庫菟原郡界傳説地」と刻まれた石柱が建っています（図-2 参照）。この石柱は、昭和天皇の大礼記念に西宮市聯合青年団が昭和 3（1928）年 11 月に建立したものです。

一般に、河川が郡界であることに由来して「郡界橋」や「境川」といった橋名・河川名があることからわかるように、河川を郡界とする事例は多々あるようです。では、夙川がかつて郡界とされていたことを、江戸時代に幕府の命により各地の藩主の手で 4 度にわたり作成された国絵図（『慶長国絵図』、『正保国絵図』、『元禄国絵図』、『天保国絵図』）で確認してみましょう。

最初に描かれた慶長 10（1605）年の『慶長国絵図』には郡界が描かれていませんが、正保 2（1645）年頃に作成された『正保国絵図』では、夙川が郡界になっていて、西宮神社は武庫郡ですが森具※⁴村は菟原郡に属しています。

元禄 15（1702）年の『元禄国絵図』でも夙川が概ね郡界になっていますが、この後、武庫郡と菟原郡の間で郡界論争（山論）が起こり、『山論裁許状』（1750 年）により郡界が確定します。裁許状には「於然者武庫郡・菟原郡境之儀、堀切川下より高塚迄、西宮町打出村田地畔限……」とあり、裏面に絵図が添えられていて、郡界は夙川ではなく堀切川とされ、森具村は武庫郡に移っています。

天保 9（1838）年に作成された『天保国絵図』でも同様の位置（堀切川付近）に郡界線が引かれています。

『今津いまむかし物語』によると、国道 2 号森具（もりぐ）交差点（夙川の西約 370m）の西にある「阿弥陀寺」に今も残る 2 つの什器（じゅうき：日常使用する器具類）の一つが貞享 3（1686）年の年記がある半鐘（小型の釣鐘）で、「摂津菟原郡夙村阿弥陀寺什物」とあり、夙村の阿弥陀寺が菟原郡であると明記されていますが、もう一つの正徳 3（1713）年に作られた双盤（そうばん：寺院で法会に打ち鳴らす金属製の盤）には、「武庫郡西宮阿弥陀寺」とあり、阿弥陀寺が武庫郡になっています。

このことと『元禄国絵図』の郡界状況を重ね合わせると、元禄 15（1702）年から正徳 3（1713）年の約 10 年の間に、郡界が夙川から堀切川に変更されたと考えられます。

※⁴ 森具：阪急電鉄・夙川駅から阪神電鉄・香櫨園駅の辺りは、その昔西国街道と中国街道が出会う地であったことから宿場町が発達し、夙川は宿場の川「宿川」と呼ばれていた。

地名にあてられた字は、時代の移り変わりに伴い字が変わり読み方も変化する。「宿」が「夙」に変わり、さらに「守具（しゅぐ）」に、そして「守」は「もり」と読んで「森」の字をあて、「森具（もりぐ）」に変化していった。因みに夙川に架かる JR 東海道本線の橋名は「守具川橋梁」となっている。



写真-5 夙川に架かる守具川橋梁

■ 誰がいつ付け替えたのか～夙川河道の変遷

以上グダグダと述べてきましたが、結局のところ西宮神社の東を流れていた夙川が、誰の手でいつごろ西宮神社の西に付け替えられ、さらに現流路に付け替えられたのか、証拠となる資料がなく明らかにはなっていません。

『西宮市史』などいくつかの文献を当たってみました。夙川の付け替えを行ったとされる人物名は全く出てきません。また付け替えの時期についても、『西宮市史・第一巻』において二度目の付け替えが「だいたい鎌倉時代の後期と考えてよい」と記されているのみで、明快な根拠が示されているわけではありません。

ただ、夙川が二度にわたって付け替えられたことは、武庫郡と菟原郡のかつての郡界が夙川旧河道だった可能性が考えられること、「宮水」を構成する戒伏流水が夙川の旧河道を通して宮水地帯に流れ込んでいることなどから、概ね受け入れられているようです。



図-3 慶長国絵図（『阪神間の地名』から引用）



図-4 正保国絵図（1645年頃）
『今津いまむかし物語』から引用・加工

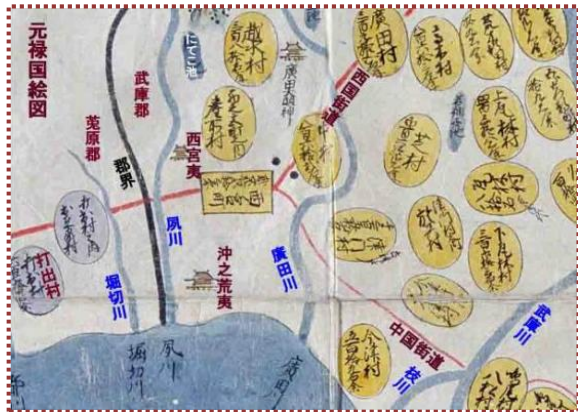


図-5 元禄国絵図（国立公文書館デジタルアーカイブから引用）



図-6 天保国絵図（『阪神間の地名』から引用・加工）

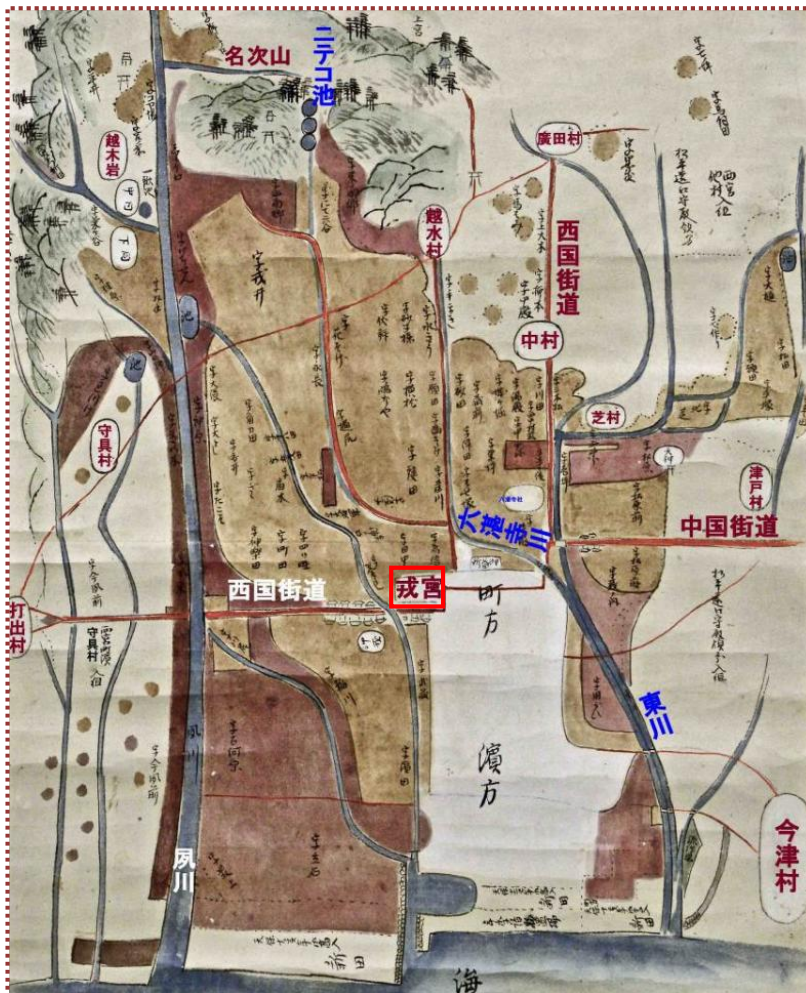


図-7 天保14年頃の西宮町周辺絵図
（「にしのみやデジタルアーカイブ」から引用・加工）

■ モノローグ

夙川の旧河道は、それほど開発されていない地域であれば古地図や航空写真から読み取ることが可能ですが、さすがに西宮は鉄道が開通して以降開発が盛んに行われた地域なので、古地形が改変されていて旧河道を読み取るのは難しいようです。

ただ、夙川の伏流水は昔と変わることなく夙川の旧河道を通り宮水地帯に流れ込んでいます。

次号では、夙川の松と桜について調べてみます。

夙 川 舞 桜

夙川周辺の桜の中から自然交配によってできた品種で、市内雲井町で平成 11 年に確認された。市民投票により「夙川舞桜」と命名された。

ヤマザクラ系で、花は半八重～八重咲き、花の色は咲き始めが淡い紅色、後に白色に変わる。山手幹線が夙川を渡る羽衣橋の下流左岸側に咲いていた。



写真-6 夙川舞桜

【参考資料】

- 1 『西宮市史・第一巻』 西宮市 昭和 34 年
- 2 『環境学習都市・にしのみや』 西宮市環境学習都市推進課 HP
- 3 『阪神間の地名』 大国正美編 平成 17 年 8 月
- 4 『夙川物語』 六甲砂防事務所 HP
<https://www.kkr.mlit.go.jp/rokko/rokko/study/shuku/shuku-b.pdf>
- 5 『西宮市立郷土資料館ニュース 第 36 号』 西宮市立郷土資料館 平成 23 年 6 月
- 6 『今津いまむかし物語』

※発行：平成 31 (2019) 年 3 月 『ひょうご水百景』 No.94

改訂：令和 8 (2026) 年 5 月 『ひょうご水百景』 No.94